

障害児家族に対するソーシャルワーク理論の変遷

ネモト, ハルヨ / 根本, 治代 / NEMOTO, Haruyo

(出版者 / Publisher)

法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The bulletin of the Faculty of Social Policy and Administration :
reviewing research and practice for human and social well-being / 現代福祉研究

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

167

(終了ページ / End Page)

182

(発行年 / Year)

2005-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015449>

障害児家族に対するソーシャルワーク理論の変遷

根本治代

はじめに

今日の福祉・医療・保健の領域において、利用者の自己決定権や主体性を重要視する価値観のもとに、障害をもつ当事者の自己決定のプロセスや主観性をテーマにした研究が多く行われている。ソーシャルワークにおける実践理論においても、現在の社会的状況のなかで実践の基本的な視点や目的に関わるパラダイムの転換とともに、新たな価値概念が出されている。自己実現、自己決定、参加、エンパワーメント、個別化、利用者の人権、選択権、コンピテンス（社会的自立性）、共生などはその例である（太田、2002；佐藤、2002）。ソーシャルワーク実践の研究は、このような価値観の変化に応じて、ナラティブ・モデルや社会構成主義アプローチなど新たなモデルやアプローチを取り入れている。

ソーシャルワークにおけるパラダイムの転換とは、秋山（2002）¹⁾によると、中範囲理論から広範囲理論への転換であり、視点から視座への転換である。つまり中範囲理論は、ある特定の因子や要素に焦点をあてることで、1つの立場から現象・事象をとらえ、医学モデルの枠内で展開されるものである。それに対して広範囲理論は、多様な立場から、立体的に現象を把握する生活モデルによるジェネリック・ソーシャルワークを志向している。また、佐藤（2002）によれば、このパラダイムの転換によって現在のソーシャルワーク独自の方法は、エコロジカルな視座とシステム思考を用いて、社会生活機能を焦点とした社会関係の視点から、人間：環境間相互作用に理論的および実践的に介入することによって変わっていくという。

わが国の障害児家族問題の研究を、このパラダイム転換に基づいたソーシャルワークの視点からとらえていくと、これまで家族の問題は治療・療育関係を通して治癒されるべき病理として扱われ、家族を「診断」し、「治療」する医学モデルが優勢であった（久保、1982）。しかし今日では、家族療法において家族をシステムとして理解するという思考方法をさらに発展させ、家族システムに影響を与える、より大きな社会システムとの関連性の中で個人をとらえていく、すなわち「環境の中の人（person-in-environment）」（Hartman&Laird、1983）として理解するというシステムの思考方法が分析枠組みの主流となってきた。ソーシャルワークにおいてもGermain（1980）によって人と環

境との交互関係を理論の中心にすえる「人間：環境間相互作用 (person : environment)」²⁾概念に基づいたエコロジカルな視座がとりいられるようになった。

しかし、今日の障害児家族への援助論においては、システム論的アプローチに基づく家族ストレス論 (橋本、1982；今川・古川・伊藤・南、1993；稲波・西・小椋、1980；田中、1996；植村・新見、1991) や、構築主義的アプローチに基づく家族社会学の研究 (石川、1995；春日、1992；岡原、1990；要田、1986) が多くなか、障害児と家族における関係性や、障害児を含めた家族全体と社会との関わりについて、具体的に実践場面にかかわるソーシャルワーク実践に基づく研究はまだまだ少ない。そこで、本稿では、これまでのわが国の障害児家族研究における理論的仮説 (モデル) と、それに連動するソーシャルワーク実践理論のアプローチの変遷を明らかにしていく。すなわち家族システム論的アプローチから発達システム論的アプローチ、さらに社会構成主義的アプローチへと発展していく変遷をたどることとする。それによって障害児家族を援助する理論としてのソーシャルワークの独自性を考察し、実践における支援の方向性を論じていきたい。

なお、検討の対象とした文献は、『社会福祉学』(日本社会福祉学会)、『ソーシャルワーク研究』(ソーシャルワーク研究所)、『家族社会学研究』(日本家族社会学学会)、『発達障害研究』(日本発達障害学会)、『保健医療社会学論集』(日本保健医療社会学会)などの学術専門雑誌を中心に、それぞれ1980年代以降の障害児家族に関する論文のなかから選択したものである。

I 家族システム論的アプローチによる障害児家族研究

1970年代以降ソーシャルワークの理論枠組みの前提把握にパラダイムが用いられ (太田、2002)、ソーシャルワークのパラダイムの転換は個人主義的、心理主義的視点から包括的、全体的視点 (一般システム論、生態学視点、エコシステム論) へと志向する動きとして説明されている (Whitaker、1975)。

家族との直接的実践活動である家族ソーシャルワークの理論枠組みには、家族療法において発展してきた知識が含まれている。これまで個人病理を対象にしてきた家族療法は、システム思考を基礎として個人病理を家族内システムの問題として捉えたことで、家族ソーシャルワークとの相違は不明瞭になった。しかし家族ソーシャルワークと家族療法が家族を1つのシステムとして捉える点では共通しているが、そのとらえ方の焦点に違いがあった。すなわち、家族療法の焦点は、「家族内」の人間関係にあり、そこでは家族システムとその下位システムの家族メンバー個々人との関係が中心に分析される。それに対して家族ソーシャルワークの焦点は、家族というシステムに影響を与えるより大きな社会システムとの関係性のなかで家族を捉えていくことにある。この家族システ

ムをさらに展開させた家族ストレスの研究は、1970年代からアメリカを中心に活発に行われ、1980年代には日本においても実証的なデータと分析に基づいた成果が報告されるようになる（渡辺、1997）。

1 家族ストレス研究の系譜

ストレス研究は従来から医学、生理学、心身医学、心理学において多くの業績があり、健康－不健康と、適応－不適応という二つの軸を基本的な視点としてきた。そして外部からの刺激要因、ストレスを受ける主体の条件、反応をとらえるための枠組みを設定してきた。これに対して社会学的な家族研究の中で形成されたストレス論は、家族をストレスの対処主体として捉えるところから始まった。³⁾ また、家族自身の回復力や対処にも焦点を当てる。家族が何らかのストレス源（障害児の誕生など）に直面すると、家族は成員相互の結びつきや団結力（凝集性）、家族内での役割配分の変更（適応性）、あるいは外部資源の活用によって、再び適応状態に戻そうと試みる（石原、1985）。この70-80年代に活発に展開された家族ストレス論の研究動向を要約すると表1のようにまとめられる。

表1 家族ストレス論の研究動向

研究内容	70年代	80年代
研究の関心	家族危機発生のメカニズム	危機からの回復・適応のメカニズム
研究方法	断片的個別的研究	実証研究に基づく理論形成
ストレス	非通例的な出来事	ライフサイクル上の通例的な出来事
対処	家族内資源の重視	コミュニティ資源の重視
アプローチ	相互作用論・状況論	システム論

（注：石原（1986）の記述を筆者が表にまとめたもの）

障害児家族研究では家族ストレス論の導入が、家族を障害児の誕生によるストレスを受ける主体から、ストレスに対処する主体として理解することにつながり、そこでは家族が直面する自らの問題をとらえ、問題に対するために効果的な支援を考えていくことが課題とされた。たとえば、谷口（1985）は障害児家族には、①家事・介護上のストレス、②所得と支出をめぐるストレス、③社会的な孤立、といった精神的葛藤からくるストレスがあるとし、家族を支援する公的サービスの必要性を示した。浜村（1985）は、家族員のストレスは家族が社会的に放置され孤立していく中に生み出されるとして、社会的支援のネットワークの構築が必要であると論じた。これらの研究は、家族をストレスに対処する主体として論じており、その対処能力を高めるものとしての社会的資源の必

要性をあげている。

その家族が直面する具体的な問題の内容を検討したのが、ストレス尺度による分析である。新美・植村(1980)は、心身障害児の母親のストレスを測定するためのストレス尺度を作成し、母親のストレス規定要因を障害児本人の属性要因や家族内の客観的な要因だけでなく、母親の主観的な態度要因も加えることの重要性を主張した。橋本(1982)は、ストレスの規定要因は家族内部にとどまらず、家族成員間のダイナミクス、価値観、さらには家族外の資源にも求められると主張している。中塚(1984)は、ストレッサーの存否よりも、ストレスをどの程度の強さで感じているかという観点からストレス尺度を作成し、その結果が新見・植村(1981、1987)の研究と一致度が高いことを報告している。今川・古川・伊藤・南(1993)は、障害児をもつ母親の態度要因に焦点をあて、母親が社会に対する期待で消極的、中間的、前向きという3つの態度に分かれたことや、夫との間に葛藤が存在することを示した。

2 家族システム論への批判

家族研究におけるこのストレス論は、障害児家族の実情を初めて体系的に論じ、また家族の抱えている多大なストレスが示した点では重要である(南山、1999)が、分析上の課題も明らかにされている。まず、ストレス尺度を用いたストレス研究の多くは、質問紙法を用いて実施されている。質問紙法には大量のデータを入手し統計量として数量化できるという利点はあるが、測定を可能とする項目に関しては、測定に寄与しない項目を排除する。その結果、家族自身が感じている意味内容を解釈するうえで重要な項目が検討されないという可能性もある。量的に大きな数値を示すものが、常に家族にとっても重要な視点であるとはかぎらない。たとえば、ストレスにさらされた親の行動は、子どもへの養育態度に影響を与え、その養育態度により子どもがストレスを蓄積することによって、それが循環して親のストレスを憎悪させ、再び子どもに返るといった円環的な関係が形成されるが、このようなストレスをめぐる円環的関係の分析は、ストレス尺度に基づく質問紙法からは見出せない。

またこのようなストレスの分析は、障害児をもつ家族に対する見方に一面性を与えることとなった。その偏向は、障害児家族への否定的な位置づけである。すなわち、家族のことを常に「たいへん」「かわいそう」など考える否定的な見方を生み出した(土屋、2002)。また、母親のショックやストレスに言及し、「悲嘆にくれる母親」「ストレスを抱える母親」といった介助する側の負担やストレスを強調する表現によって、逆に介助という行為や介助を受ける側に対して、否定的な価値づけを生み出すこととなった(南山、1999)。また石原(2001)も、家族システムの動態を捉えよう

とする枠組みは、因果論的な変数関係の設定とその操作化による検証という手順ではとらえにくいと指摘した。そこで石原は、エコロジカルな視点を強調したエコシステム・パラダイムから家族をとらえることにより、家族ストレス論の再生を試みた。家族のストレスをシステム変化に伴う混乱や苦痛として捉えることは、家族にとって親族や友人、社会との関わり方といった生活の他の部分にも影響を及ぼせることになるとし、今後の家族ストレス論では相互作用的・解釈学的な家族研究が必要であると述べている（石原、2001）。このように、家族ストレス論にも適応の概念の導入による、エコロジカルな視点への移行が試みられている。

II 発達システム論アプローチによる障害児家族研究

これまでの家族ストレス論から、障害児家族が経験する困難や生活課題が明らかにされ、家族のもつストレスに対する対処をいかに支援していくかという援助者側の視点が重要視されてくる。つまり障害児をもつ家族が抱える生活ストレス（Germain、1992）は、生活環境における歪んだ交互作用によって発生するものであり、その支援とは家族の生活を中心に据えて、それを取り巻く人、環境、両者の相互関係を有機的に捉えていくことである。援助の展開とは、本人への援助を起点として、そこからより大きな支援のためのシステムを順次創出していくことである。このようなシステムは、家族構成員のさまざまな生涯のステージにおける出来事や家族状況の変化に対応しながら発展するものである。

1 発達システム論アプローチとは

Mitchell (2002) は、障害をもつ人と家族との相互作用に重点をおいた発達システム論アプローチをとりあげ、その視点として2つの中心的な仮説を分析の観点としてあげている。第1は、エコロジカルな視点である。その視点とは、本人から家族、家族から地域、地域から社会というより大きなシステムへの展開は、それぞれの過程における、新しいシステムの創出を意味し、これは Bronfenbrenner (1979)⁴⁾が提示した、ミクロ、メゾ、エクソ、マクロのシステムのモデルに通じるものである。第2は、発達学的視点であり、障害をもつ子どもとその家族が経験する困難は、家族の発達に沿って見た場合、特定のライフステージにおける発達課題と密接に関わっている。ここではこの2つの仮説に基づき、現在の障害児家族研究を分析していく。まずは、Bronfenbrenner のモデルを基本枠組みとして（Bronfenbrenner、1979/1996、pp.23-28）、これまでの障害児家族研究をエコロジカルな観点から整理してみたい。

1) 生態学的視点

① ミクロシステムの分析

障害児家族は、障害児および親と兄弟姉妹の間で経験されるさまざまな活動、役割、および相互の関係が成立するミクロシステムを形成していると考えられる (Mitchell, 1986)。

配偶者サブシステム (夫—妻間の相互作用) においては、配偶者との関わりにおける母親の意識を調査した研究 (今川・古川・伊藤・南, 1993) で、「配偶者への期待」と「配偶者の実際」という観点からその認知の構造が捉えられている。その結果から、母親が、配偶者に対してもつ期待と実際の配偶者の行動が必ずしも一致しているとは認知しておらず、また自分の行動についての評価も配偶者からの期待や実際と一致しないと判断していることを明らかにした。すなわち母親の期待は満たされないままになっており、期待と現実の間での葛藤している姿が示されており、夫婦関係におけるストレスのより複雑な様相が含まれている可能性を示した。

また牧野 (1996) は、父親の育児家事分担意識や参加状況に対する母親の受け止めが、母親の育児不安と関連していることを報告している。また障害児をもつ父親の直接的な役割の重要性を示唆した広瀬・上田 (1991) や杉原・小松・浜野・服部 (1992) の研究がある。澤江 (2002) は障害児をもつ夫婦の子育て充足感について、父親と母親の子育てに関する肯定感の違いを示した。とくに子育て充実感においてはこれまで母親を対象とした研究が多いなか、障害児をもつ父親の直接的な役割の重要性を示していた。

兄弟姉妹サブシステムについては、渡辺 (1982) や溝上 (1996) が取り上げているが、家族内の問題から捉えているだけで、兄弟姉妹と社会との関係まで広げた内容にまで至っていない。三原 (1998) は、障害者の兄弟姉妹の結婚と両親の亡き後の障害者の世話の問題をテーマにして、生活意識調査を実施し、これまで母親中心に取り上げられていた介護問題に対して兄弟姉妹の役割意識を明らかにしている。最近の研究では、障害のある子どもと親、兄弟姉妹間の相互作用の重要性の認識は増し、エコロジカルな視点による分析が重要視されている。

② メゾシステムの分析

障害児・者が、家族のミクロシステムで他のメンバーと相互に作用するように、家族もまたより広い社会のメゾシステムのなかで相互に作用し、これらは家族が日常生活を営む上で、集団的かつ個別的に参加する家族外のシステムを構成している (Minuchin, 1974)。

メゾシステムに生起する問題として、母親の障害の認知や対処能力に大きく影響するとされる専門職の関与をとりあげた研究が多い。たとえば4歳以下の障害児やボーダーライン児の母親のストレスが高いこと、それが医師や保健師のようなフォーマルサポートで緩和されることを示した研究

(松尾・石川・二村、1994) や、3歳児健康検査以降の地域療育における早期療育への連携の重要性をあげた研究(松尾・石川・二村・渡辺、1995)がある。

嶋崎(1998)は、家族援助の側面からセルフヘルプグループとしての親の会の役割に注目し、それは、「子どもの障害の受容」に至る親の葛藤を同じ立場にいるメンバーが共有することで、相互に自己のアイデンティティを確立する場になるとした。そこから親の会が、そのグループとしての閉鎖性を打破するための機能として、地域コーディネーターやコミュニティワーカーの役割に注目し、その役割として、①情報の提供と均等化、②指摘と助言、③代弁者、④連絡・調整、⑤メンバー間の調整、⑥ネットワーカーの6点をあげており、多様なソーシャルワーク機能の必要性をあげている。ソーシャルワーカーは親に情報と援助をさまざまなメゾシステムの要素から得られるように支援することや、同様に障害児のニーズを、親戚や友人、家族の仲間に知らせることが重要な役割とされる。

③ エクソシステムの分析

エクソシステムでは、社会的な手続き、規則および価値システムを通して、障害児・者のいる家族に影響を与える公的私的機関を考慮に入れる。これらの影響は間接的であり、メゾシステムレベルの個人または組織との媒介的位置にある(Mitchell, 1986)。家族のエンパワーメントの促進につながると思われるレスパイトサービスは、「家族が必要とする一時的な介護サービスを、利用者中心に提供するサービスである」という基本理念が確認されるようになり、より大きな枠組みとして「家族支援(ファミリーサポート)サービス」として捉えられている(北岡、1997)。レスパイトサービスの意義を提示した研究(名川、1994; 曾根・佐藤、1995; 富井、1996)も数多い。このエンパワーメントを促進させる家族支援サービスを展開させていくためには、ソーシャルワーカーの役割として、援助過程に家族が参加し、積極的に課題に取り組めるよう方向づけ、実施した結果に伴う達成感が、さらに家族のコンピテンスを促進させるような援助へと展開させることが求められる。

④ マクロシステムの分析

最後に、一般的な価値、観念、および社会を特徴づけるイデオロギーを構成するマクロシステムがある。近年、ノーマリゼーションとインクルージョンの概念は家族問題研究にとって重要なアプローチとして広く認められている。一方、偏見や差別という「社会的圧力」は、家族の生活全般に支障性を与える。藤井(2000)は、「障害者の家族であることに肩身の狭い思いを体験する」ことを「スティグマ感」と呼び、そのスティグマ感の要因として、①親の受けた教育や社会体験、②障

害告知の際の配慮、③障害受容の困難性、④家族の孤立感（障害を知ったあとの心理的社会的支援の欠如）、⑤相談機関に関わる人の態度のあり方、⑥周りの人の偏見をあげている。また志賀（2002）は、社会から受けるスティグマ感は、それを直接に受ける本人のみならず、その友達や家族に浸透することに言及し、「名目的スティグマ」として提示している。そこでは地域の偏見・差別などの意識や、硬直化した制度などの変革を行う社会改良・環境の改善を働きかけるソーシャルワーク実践が重要となる。

このように Bronfenbrenner が提起するミクロ・メゾ・エクソ・マクロのシステムを基本軸にし、これまでのわが国の障害児の家族研究を整理すると、それぞれのシステムで特化した視野や関心によるアプローチではなく、すべてのシステムを包括した実践枠組みのもとで包括・統合的な視野で実践を展開させていく必要性が見えてくる。つまり、ソーシャルワーク実践における研究方法においては、「人間：環境間相互作用」というエコロジカル・ソーシャルワークの思考枠組みを中心に、ミクロ・メゾ・エクソ・マクロのシステムにおける共通の実践枠組みで、常に環境を再構築していく力動的な存在である（久保、2002）ことを理解し、ソーシャルワーク実践を展開していく必要があるのである。

2) 発達学的視点

障害をもつ人と家族への援助モデル構築を研究とする Mitchell (1986) は、このようなエコロジカルな視点とともに、その第二のアプローチとして発達の視点の有効性を提示している。この発達学的アプローチは、家族社会学におけるライフサイクルアプローチの特色とされ、1950年代にアメリカの家族社会学者や家政学者によって研究が広められた（野々山、2001）。わが国における障害児家族研究においても、ライフサイクルに着目する研究が1970年以降に多く発表されている（新美・植村、1978；橋本、1982）。ここでは、子どもが成長する各段階において、家族が対応すべき共通の発達課題があると設定され、各段階における問題を抽出し、その対処法の構築やストレス源を除去するための研究が多くされた。ここでいう発達課題とは、個人の一生のある時期、またはその前後に生ずる課題であり、ライフサイクル上、家族は障害をもつ人のそれぞれの発達と関連した一連の段階過程を通過すると考えられ、それは個々の発達上の課題によって特徴づけられる（Havighurst、1972）。障害児家族研究における発達課題は、障害をもつ本人を含む家族が対処を必要とする生活問題のなかでとりあげられている。ここでいう発達課題とは、人間が正常な発達をするためにその各ライフステージにおいて到達を社会的に期待されている諸能力の水準であり、生活問題とは、人間の生命活動の過程において、通常の問題処理過程によっては解決困難な出来事をいう（佐藤、2001、p.136）。

渡辺（1997）は、家族の発達課題を、親に求められる課題や責任を中心に「親自身の心理面における課題」、「家族内における課題」、「家族外の社会関係における課題」の3側面から分類し、家族が対処する発達課題は、障害をもつ子どもの発達と密接に関わりながら段階的に変化していくことをあげている。渡辺の分析からそれぞれの発達段階の課題は、例えば障害受容においては、親の不安の対応などの心理的課題といった家族のミクロシステム内の相互作用だけでなく、医療・保健ケアの確保などの社会的なシステム間の相互作用にも起因していることがわかる。そこには家族の発達課題をミクロ・メゾ・マクロシステムのそれぞれ複数のシステムにまたがって影響を与えあっていることを視野にいれ、各段階に応じた効果的な援助が求められるところである。

Ⅲ 社会構成主義的アプローチによる障害児家族研究

これまでの家族ソーシャルワークにおけるシステムアプローチに対して、近年、新たな視点として社会構成主義という理論がソーシャルワークの援助を考えるための基礎理論として注目を集めている。社会構成主義（social construction）の源流は、Berger & Luckman（1966）による、『現実的構成』に求められる（野口、1999）。ソーシャルワークにおける社会構成主義の考え方は、「伝統的あるいは近代的な知の前提となっている方法論に懐疑的で、頑固たる現実が定立されていたり、あるいは客観的な真理というものを想定するのではなく、現実是人々の日常のコミュニケーションのなかで、不断に構成され、つくられていく」という立場をとる（木原、2003、p.168）。

1 研究の系譜

ソーシャルワークにおける社会構成主義は、1980年代後半の家族療法におけるシステム論からの物語論的展開に大きく影響されている。この頃、家族療法におけるシステム論への批判が高まり、Anderson & Goolishian（1988）は、次のようにシステム論を批判している。システム論の限界としては、①階層構造や権力関係、社会的不平等や差別を自明視する点、②セラピストに対して対象（システム）が客観的・独立的に実在すると想定している点、③セラピーにとって、「意味」が重要であることを見落としているといった3つの課題がある（浅野、2003）。この不満をきっかけに、家族療法のポストモダンの方法として登場したのがナラティブ・セラピー（物語療法）であった。

この家族療法の変化の影響を受け、社会構成主義はソーシャルワークにおけるシステム思考に替わる新たな理論のひとつとして登場している（加茂1995；1998、野口1995、木原1996；2000、狭間2001、松倉2001）。一般に社会構成主義理論をベースに、ソーシャルワークのなかで応用された

ものをナラティブ・モデルと呼ぶことが多いが、その導入の背景には、社会に存在する構造的矛盾と、セルフ・ヘルプ・グループなどの、問題を抱える当事者自身が自らパワーを獲得する動きに対して、これまでのシステム思考によるとらえ方では限界が生じてきたからである。(久保、2002 p.158)。この社会的構造の矛盾から、個人と社会という分節を基本に据えて認知する近代主義が疑問視されるようになる。ナラティブ・モデルでは、ソーシャルワークにおける介入対象を、これまでの個人や社会、そして個人と社会との交互作用からとらえるのではなく、人々の間で作り出された「物語」それ自体であるとする。そのアプローチは、White & Epston (1990、1992) による「脱構築」によって特徴づけられ、ソーシャルワークの実践理論のうえで注目されることとなる。

障害児家族研究においても、母親の主観や経験に基づくナラティブなアプローチによる分析が主流となりつつある。松倉 (2000) が「当事者としての親」という視点と「受容」という事態に焦点を絞り、親たちの「ナラティブ」をもとに親たちの苦悩について分析している。松倉は、親たちがこれまで生きてきた人生や価値観の中に「障害」や「障害受容」を位置づけ、「オルターナティブなストーリー」として自分の言葉で語り、「もう一つのストーリーを作っていくこと」こそが、「障害児の親たち」への一連の援助のスタートになると主張している。そこでの母親の苦悩は「障害児をもつこと」の「不条理」であり、社会の差別的な「まなざし」であるとする。そこでは「障害児の親」から問題の外在化によって、自己と切り離し、それを相対化させる必要性をあげている。

夏掘 (2003) は、わが国の障害児の「親の障害受容」の研究を、「共同療育者」論と「認識変容」論とに分け、それぞれの批判的検討を行っている。研究の2つの系譜では「障害受容」という1つの言葉を介して、「望ましい親役割」を定義し、役割規範を強化していること、「受容」した親像を提示することで「良い親/悪い親」をカテゴリー化されることでの、現実の親たちの負担をあげている。その特別な負担を解消するためには、思考のうえで子の「障害」と「子どもの存在」を切り離し、「障害児の親」問題を検討していく必要性をあげている。つまり社会のまなざしや専門職などから作られた望ましい「障害児の親」というドミナント・ストーリー⁵⁾を、「障害」と「子ども」の外在化をはかることで、自分の子どもの子育てというオルターナティブ・ストーリーの構成から、新たな親役割が見出せること、そこにソーシャルワーカーが支援していく必要性をあげている。

また、藤原 (2002) は障害児の母親役割について、親子関係のなかで連続的に続いている母親と子どもとのかかわりは、育児期を越えた段階に至っても「介護」として捉えられることがない。障害児の育児・介護を担う当事者という視点で、障害をもつ子どもの人権を擁護し、QOLを保障することと、母親の人権や生活の質の追求といった、障害児の生活、母親の生き方、家族のあり方というそれぞれの「自立」のかたちを探ることの必要性を提示している。

2 ナラティブ・モデルへの批判

最後に、このナラティブ・モデルに対する批判を紹介しておく。その批判の要点は、主に母親の意識を変えるだけで、社会的な差別や偏見は変化することなく、「個人モデル」の変形にすぎないのではという疑問である。確かに、ナラティブ・モデルには、ソーシャル・アクションのように社会的な不正や差別への直接的な働きはない。この点について White (1990) は、物語が家族生活の発達についてのみ話されるわけではない。むしろ、世間話の中で発見される物語が、家族の発達の構成要素と考えられる場合があるとしている。つまり、障害児のいる家族が遭遇する発達の問題は、家族を取り巻く言語社会に広まる議論によって影響されるのである。

障害児の母親の役割負担についての母親のナラティブには、よく自分の子どもとの関係性を「終わりのない子育て」という表現をとり、その考え方は誰にでもある表現ではなく、1つの対象物として外部に表現され、障害児・者のいる家族に容認され、受け継がれている。「終わりのない子育て」という表現は、「障害の重い子どもは一生親が面倒を見なければならない」、「子どもの自立を一生経験できない」というドミナント・ストーリーによって構成されている。これらは家族が語る物語を通して構成され、維持されているという認識がある。「脱構築としてのセラピー」⁹⁾において、クライアントがセラピストのもとに持ち込む問題や苦痛も、また物語によって構成されるものであるから、その物語を書き換え語り直すことで苦痛・問題は緩和できるとする(浅野、2002)。

ソーシャルワーク実践の展開からとらえてみると、親たちがもつ「障害をもつわが子」「障害児を抱える私」といった、親が「自分」と「問題」とを融合させ、両者をイコールで結ぶような語り方をする場合、援助者は問題を子どもや親から切り離し、「障害をもつわが子が問題である」という語りから、「問題なのは、子どものもつ障害そのものであり、子どもと親は別ものである」という語りへの移行を通じて、問題に対抗する家族、エンパワーされる家族といった視点の変化が必要であろう。そこにはセルフ・ヘルプ・グループや親の会などの活動を出発点として、社会改革、政策の改善にまで展開していく可能性も含んでいる。これは専門職による、家族のもつドミナント・ストーリーを「個人」と「社会」に同時に働きかける試みといえる(Saleebey、1994)。それはソーシャルアクションのように、社会制度の改善を要求するものではないが、より深いレベルで制度を支える前提を変更するものと考えられる。

このように社会構成主義は、「個人」と「社会」とに同時に働きかけることで、環境についての構成的見解に導く。その見解は発達する人間は環境に影響を与えられるといった受動的な存在ではなく、自ら環境を再構築し、成長し続ける力動的な存在であるととらえている。発達システム論や社会構成主義においても、個人と環境は対置される関係にあり、個人と環境は多くの相互作用が繰り返

返され、この状況の中どのようにソーシャルワークが介入していくかが大きな課題と考えられる。

まとめ

以上、障害児家族研究をとおして、研究の動向からそこにみる実践アプローチの変遷をとらえてみた。家族システム論から発達システム論への移行と、さらに社会構成主義アプローチについても言及した。

障害児家族研究はこれまでミクロのケースワークを中心にした視点から、メゾ・エクソ・マクロへと支援の焦点を拡大させてきた。それぞれのシステムに必要なソーシャルワーク機能とその展開が求められるとともに、家族それぞれの人と環境を理解するうえで物語の活用が導かれるところである。今後の研究課題としては、障害児をもつ家族それぞれの特有の日常生活の文脈と、相互作用に着目したソーシャルワークの支援のあり方について考察していきたい。

<注>

- 1) ここで使用されるモデル、アプローチ、パラダイムの概念規定は太田・秋山(1999)が提示した以下のそれぞれの概念を使用する。「アプローチとは特定の構成要素、決定因子、もしくは特定の理論上の視点によって対象を認識し、それを基に作成された方法、技術、を用いて、クライアント(利用者)の問題解決を目指す一連の体系的な実践過程のことである。」(p.171)「モデルとは、認識できる事象や現象を抽象的に、時には隠喩的に描写するものである。即ち、認識可能な複雑な実体の部分もしくは全体を、ある特定の決定因子に支配されず、一つの体系的思考形態によって描写、記述することによって、抽象的な理解を促し深めるものである。」(p.172)また、パラダイムは、トーマス・クーンがその著書『科学革命の構造』(1962)のなかで用いた概念とされる。その定義は「パラダイムとは広く人々に受け入れられている業績で、一定の期間科学者に、自然に対する問い方と答え方の手本を与えるものである」とするが、一般的に誤用、俗用が日本では生じている。ここではソーシャルワーク概念に用いた、太田・秋山が定義する次の内容を使用する。「パラダイムとは理論的に現象・事象・データなどを解釈するための一組の前提によってなる、時代に共通な思考の枠組みである。この思考の枠組みが現象や問題を概観し、適切な探求方法を提示し、判断基準の設定を行うものとなる。」(p.173)。
- 2) Germainはここでハイフン(—)を使用せず、コロロン(:)を使うところに、人と環境がただ関係しているだけでなく、一体であることが表現されていると論じている。

Germain, C. B. (1991). *Human Behavior in the Social Environment: An Ecological View*. New

York: Columbia University Press, p.17.

- 3) 1985年に日本において、はじめて家族をストレス論の枠組みで研究した石原（1985）は、家族ストレスを次のように定義する。「ある生活パターンを作り上げている生活システムとしての家族に、なんらかの刺激要因—これをストレス源となる出来事としてとらえることが多い—が加わることによって、従来の生活パターンが攪乱され、既存の対処様式や問題解決方式では平衡を維持できない状態（これを危機と呼ぶ）に立ち至る状況、さらにそこから立ち直ろうとする努力とその結果までを含む動的な過程を指す」（石原、1985, p.18）。
- 4) Bronfenbrennerは、①発達し続ける人間が直接的、対面的な接触を通して経験する最小の発達の文脈を表す（例：家族、友人、級友など）マイクロ（micro）・システム、②発達し続ける人間が活発に参加する二あるいはそれ以上の状況間の相互関係を表す（例：家庭・学校・近所の遊び仲間の関係、家族・職場・社会生活間の関係）メゾ（meso）・システム、③活発な参加者として発達し続ける人間を巻き込むものではないが、主要な発達の場面に影響を与える一つ以上の場面（例：親の職場、兄弟が通う学級、親の友人ネットワークなど）を意味するエクソ（exo）・システム、④イデオロギー、信念体系、習慣、法律といった無形のものに支えられた社会の一般文化を表すマクロ（macro）・システムという、同心構造の入れ子状の配置として位相的に認識される4つのシステムを提起した（佐藤、2002 pp.103-104）。
- 5) 「ドミナント・ストーリー」（White, M.&Epston, D. [1990=1992]）とは、人々の体験と行為をその人も気づかぬうちに型にはめてしまう物語を、物語療法では「ドミナント・ストーリー」と呼んでいる（浅野、2001）。他者や社会が優勢なストーリーのため、語り手本人にとって重要な出来事・経験の方は、物語の外に取り残してしまう。したがってセラピーの最終目標は、クライアントをドミナント・ストーリーから解放し、彼らの「生きられた経験」により、彼らによる選択可能な、オルタナティブ・ストーリーへの書き換えと語り直しを援助することとされる。
- 6) 物語の「脱構築」とはホワイトとエプソンによる理論で、「人間の生きている世界・人生・自己といったものすべて（要するに彼にとってのありとあらゆる現実）が、彼・彼女の語る物語を通して生み出され（構成され）、また、維持されるという認識である。だとすると、クライアントがセラピストのもとに持ち込む問題や苦痛もまた物語によって構成されるものであるから、その物語を書き換え語り直すことで苦痛・問題は緩和できるはずだ」（浅野、2001 p. 96）との考えである。

参考文献

- 秋山薊二 (1999) 「ジェネラル・ソーシャルワークの実践概念」 太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーク』光生館, pp. 43-82。
- 秋山薊二 (2002) 「社会福祉実践モデルとアプローチの変遷」 仲村優一・窪田暁子・岡本民夫・太田義弘編『戦後社会福祉の総括と二一世紀への展望』ドメス出版, pp.163-190。
- Berger & Luckmann(1966). *Social Construction of Reality*. 山口節郎訳 (1977) 『日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法』新曜社。
- Bronfenbrenner, Urie(1979) *The Ecology of Human Development : Experiments by Nature and Design*, the President and Fellows of Harvard College.
- 磯貝芳郎・福富護訳 (1996) 『人間発達の生態学—発達心理学への挑戦』川島書店。
- C. B. ジャーメイン/小島蓉子編訳・著 (1992) 「人間と環境の交互作用」『エコロジカル・ソーシャルワーク』学苑社, pp. 101-127。
- 藤井薫 (2000) 「知的障害者家族が抱くスティグマ感—社会調査を通して見たスティグマ化の要因と家族の障害受容」『社会福祉学』, 41(1), pp. 39-47。
- 萩原清子 (1984) 「在宅寝たきり老人と家族介護者政策—加法主義か減法主義か」長野大学産業社会学部『長野大学紀要』6 (1)。
- Harvighurst, R. J. (1972) *Development Tasks and Education*, 3rd edn, David McKay Company Inc.
- 児玉憲典・飯塚裕子訳 (1997) 『ハヴィガーストの発達課題と教育』川島書店。
- Hill, R. (1958) Social stresses on the family. *Social Casework*, 39, 139-150.
- 広瀬たい子・上田礼子 (1991) 「脳性麻痺児 (者) に対する父親の受容過程について」『小児保健研究』50, pp. 489-494.
- 石原邦雄 (1982) 「家族ストレス論—社会学からのアプローチ」加藤正明・藤縄昭・小此木啓吾編『家族の診断と治療・家族危機』弘文堂, pp. 343-371。
- Kenneth. J. Gergen/永田素彦・深尾誠編訳・著 (2004) 『社会構成主義の理論と実践 関係性が現実をつくる』ナカニシヤ出版。
- 木原活信 (2002) 「社会構成主義によるソーシャルワークの研究方法—ナラティブ・モデルによるクライアントの現実の解釈—」『ソーシャルワーク研究』27(4), 相川書房, pp. 28-34。
- 木原活信 (2003) 「対人援助の福祉エートス —ソーシャルワークの原理とスピリチュアリティ」ミネルヴァ書房。
- 久保紘章 (1982) 「障害児をもつ家族に関する研究と文献について」『ソーシャルワーク研究』8 (1), 相川書房, pp. 49-54。

- 久保紘章 (2002) 「社会福祉実践方法と人と環境へのアプローチ」 仲村優一・窪田暁子・岡本民夫・太田義弘編 『戦後社会福祉の総括と二世紀への展望』 ドメス出版, pp. 142-162.
- 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子 (1996) 『子どもの発達と父親の役割』 ミネルヴァ書房
- 松原和子・小松正代・浜野晋一郎・服部満生子 (1992) 「重症心身障害児をもつ両親の障害受容と養育姿勢」 『小児保健研究』 51, pp. 517-521.
- 松倉真理子 (2000) 「ソーシャルワークにおける「ストーリー」の思考—「障害児の親」プロトタイプと「障害受容」の困難さをめぐって」 『ソーシャルワーク研究』 1 (3), 相川書房, pp. 48-55.
- 松村昌子・岩崎隆彦 (1998) 「自閉症障害を持つ子どもの学齢期の家族支援」 『発達障害研究』 20 (1), pp. 12-24.
- 松尾久枝・石川道子・二村真秀他 (1994) 「極小未熟児のソーシャルサポートシステムの検討—サポートネットワークの分析による学齢期までの追跡調査結果—」 『小児の精神と神経』 34, pp. 57-68.
- 松尾久枝・石川道子・二村真秀・渡辺勤持 (1995) 「社会資源ストレスに対するソーシャルサポートネットワークの効果」 『発達障害研究』 17 (3).
- McCubbin, I. & Patterson, J. (1983) The family stress process : The double ABCX model of adjustment and adaptation. *Marriage and Family Review*, 6, 7-38.
- Mitchell, D. R. (1986) A developmental systems approach to planning and evaluating services for persons with handicaps, in *Rehabilitation, Volume 2*, (ed. R. I. Brown), Croom Helm, Beckenham, Kent.
- 溝上修 (1979) 「障害児の家族研究—その研究課題と方法論の検討」 『佐賀大学教育学部紀要』 27, pp. 101-116.
- 中村佐織 (1998) 「ジェネラル・ソーシャルワークにおける展開過程の意義」 『ソーシャルワーク研究』 24 (1), 相川書房, p.17-23.
- 中野敏子 (2000) 「知的障害者福祉とソーシャルワーカー—パラダイム転換と新たな役割・機能」 『ソーシャルワーク研究』 25 (4), 相川書房, pp. 77-84.
- 名川勝 (2001) 「学齢期の地域支援を考える」 『発達障害研究』 23 (2), pp. 106-112.
- 中塚善次郎 (1984) 「障害児をもつ母親のストレス構造」 『和歌山大学教育学部紀要』, 33, pp. 33-40.
- 新美明夫・植村勝彦 (1987) 「学齢期心身障害児をもつ父母のストレス・代表事例による母親のストレス・パタンの分析」 『特殊教育学研究』 25 (2), pp. 29-38.
- 新美明夫・植村勝彦 (1981) 「就学前の心身障害幼児をもつ母親のストレス—健常幼児の母親との

- 比較」『発達障害研究』3 (3), pp. 206-216。
- 野々山久也 (1992) 『家族福祉の視点：シリーズ・現代社会と家族①ミネルヴァ書房。』
- 太田義弘 (1992) 「ジェネラル・ソーシャルワークの基礎概念」太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーク』光生館, pp. 9-42。
- 太田義弘 (2002) 「社会福祉実践方法のパラダイム変換」仲村優一・窪田暁子・岡本民夫・太田義弘編『戦後社会福祉の総括と二一世紀への展望』ドメス出版, pp.57-82。
- 佐藤豊道 (2001) 『ジェネラリスト・ソーシャルワーク研究』川島書店, pp. 143-156。
- 佐藤豊道 (2002) 「社会福祉実践研究方法試論」仲村優一・窪田暁子・岡本民夫・太田義弘編『戦後社会福祉の総括と二一世紀への展望』ドメス出版, pp.83-105。
- 庄司洋子 (1993) 「家族福祉研究」京極高宣編『現代福祉学レキシコン』雄山閣出版, pp. 280-281。
- 田中斎 (2001) 「学齢期の放課後, 長期休暇時の地域サービスー地域療育等支援事業から見たニーズと実状ー」『発達障害研究』23(2), pp. 77-84。
- 高橋朋子・大久保秀子 (1994) 『家庭福祉論』学文社。
- 土屋葉 (2002) 『障害者家族を生きる』勁草書房, pp. 23-53。
- 山辺朗子 (1990) 「社会福祉における『家族』の位置についての一考察」日本社会福祉学会『社会福祉学』31。
- 要田洋江 (1996) 「障害児と家族をめぐる差別と共生の視覚 家族の愛の再検討」栗原彬編『日本社会の差別構造』講座差別の社会2』弘文社。
- 渡辺顕一郎 (1999) 「心身障害児者の家族支援をめぐる現状と課題」『ソーシャルワーク研究』24(4), pp. 43-49。
- White, M. & Epton, D.(1990) *Narrative Means to Therapeutic Ends*. New York: W. W. Norton. 小森康永 [訳] (1992) 『物語としての家族』誠信書房。